
輝き出す原石（仮題）

鳳圭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

輝き出す原石（仮題）

【Nコード】

N3887X

【作者名】

鳳圭介

【あらすじ】

高校入試であらゆるところに滑るに滑り、定員割れを起こしていた武偵高校に、泣く泣く入学した主人公、柳生天斗。興味もない銃を買い、嫌々日々を過ごしていた彼は、ある日命を狙われることに……。

（まだ仮設定です。）

プロローグ

窓の外を、落ち葉が舞っていく、11月の小春日和。『授業なんざ、ほっとけ』と、言わんばかりに机に突っ伏しながら、窓の外をのんきに眺めてるのは、俺こと、柳生天斗である。

いやしかし、窓際っていうのは良いもんだね。太陽があたって、程よい気温。クーラーもあるので、夏場に暑い思いも大してせずに済む。

まったく、みんなももう少し余裕をもって授業を受ければいいのに……。何をそんなに緊張してるんだい？

と思っていた俺の耳元で轟音が響く。

「なにやあ!？」

変な声と共に、飛び起きる。

そして、その視線の先いたのは……

「ら……蘭豹センセイ……」

「おう、やっと起きたか……」

まだ硝煙のなびくS & amp; W・M500を頭上に向けて構えている、わが校イチのキチ●イ先生、強襲科^{アサルト}の蘭豹だ。

「えーっと、今日もいい天気ですね……」

「その前に言うことあるんちゃうか？」

「寝ててごめんなさい……」

「そーかそーか、悪いとは思っとるんやな……」

「え?……あ、ハイ」

なんだろう、この人気のせいか青筋浮かべてるぞ? 笑顔で。すっごいいい笑顔なのに、青筋のせいでこの上なく恐ろしいことになってるんだが、気のせいなのか……?

「じゃあ、グランド10周、一緒に走るか？」

「ええ……」

そんなに運動得意じゃないのに……。

また轟音が響きわたる。

「何か言うたか？ 暴発して聞こえやんだわ」

「イエ、ナニモイッテマセン。ヨロコンデハシラセテモライマス」

暴発なんてあんな状態でするわけないだろ、わざとだろ、わざと！

「そうかいそうかい、素直な奴は好きやで」

ああ、俺はなんでこんな高校に来ちまったんだ……？

そう、俺のいる高校は、『東京武偵高校』。

俺が最も来たくない高校だった。

グラウンドを蘭豹と一緒に走って（と言うか、鬼ごっこだった）教室に戻ってきたら、次の授業が始まっていた。

しかし、蘭豹のやつ、後ろからM500をぶっぱなしながら追いかけてくるなんて……。鬼だろ、リアル鬼婆だろ、アレは。

さて、教室に入って最初に目が行くのが、Eランク武偵の遠山キンジさんだ。彼は、俺のように、サボってEランクというわけではなく、一般科目では、かなり上位の成績を取っている。たしか、春の試験で休んだせいで、Eランクになったんだとか……。

さて、なぜ真っ先に目が行ったのか……。それは、俺がキンジさんのことを尊敬しているからだ。

Eランクでも、勉強をちゃんとして、人徳がそれなりにあつて、そして何より同じ目標をもっている。

普通科高校への転入。それが、俺とキンジさんの目標。少なくとも、俺には変な趣味はないし、彼にもそんな趣味がないことを祈っている。

ともかく、彼には共感できるところが多い。が、話したことは1度もない。

何故なら、Sランク武偵の双剣^{カドラ}双銃のARIA様が、休み時間毎に彼に話しかけてるからだ。俺みたいな奴は、Sランク武偵とは、話が合わないだろうしな。

それに対して、キンジさんはぶつくさ言いつつも話に付き合っている。要するに、いい人なんだろう。しかも、ある1年生は、彼のことを『師匠』と呼んで慕っているらしい。人徳も、実力も、兼ね備えている人として、尊敬していると共に、俺は地味にライバル心を燃やしているわけだが、俺じゃ勝負にならん。

俺に人徳？ 無いよ。せいぜい、女子からいい人止まり程度で、頼み事をされる程度だ。

実力も、それ以前の問題でやる気がないし。

ああ、考えてたら悲しくなってきた。

寝よう。もう、何も気にせず寝よう。

そう思いながら、机につつ伏す。その状態で、窓の外を見ると、

視界の端……情報科の屋上で、何か光った。

「あれは……」

スナイパーライフルの、スコープの反射光だ。

「俺を見てるわけじゃないだろうし、気にしないでいいか」

そう言いつつ、目を閉じる。

そして、意識が暗い闇の中に堕ちていく。

「あいつが今回の目標か？」

「らしいな」

情報科の屋上に、2人の人影があった。

1人はシャイタックM200を構え、スコープを覗き込んでいる。

銃身の先端には、サプレッサーはなく、マガジンもはまっていない。

あくまで、鷹の目が目的のようだ。そのスコープの先には、いかにも眠そうな顔をした少年がいた。

もう1人は、腰にハンドガンを吊っている、巨漢の男だ。銃はグ

リップしか見えないが、おそらくはDEだろう。それほどの大きさ

はある。

「しかし、あんな奴を殺せなんて、何を考えているんだろうな……」

と、巨漢の男が手元の資料のようなものを眺めながら、つぶやいた。

「余計なことを気にするな。俺たちは、依頼されたとおり、探し、

見つけ、殺す。それだけだ」

「そうだな」

そのとき、スコープの向こうで、少年がこちらをむいた。

「……………!？」

「ばれたのか？」

「いや……バレていないはずだ……おそらくだが」

わずかな沈黙の後、スナイパーはM200のバイポッドを畳み、銃を担いだ。巨漢の男が身を翻して歩き出そうとした時、

「もう、見つかってるで、あんたら」

2人の男が戦慄した。

屋上の入口、そこに立っていたのは、

「蘭豹……」

「厄介な奴に見つかったな……」

2人が、憎げに顔を歪めるが、それを蘭豹は笑顔で流し、

「あんたら、今日は見逃してやってもええわ」

「何？」

スナイパーが訝しげに聞き返す。蘭豹は笑顔を崩さないまま、

「逃がしてもええ言うとるんや。ほれ、好きなところ行き」

そう言っ、屋上の出口を開ける。

「何のつもりだ……?」

「今は特に気にしとらんだけや」

「フンッ……」

2人の男は、出口に向かって歩く。あくまで、背後の気配を気にしながら。

「ただし……」

ちょうど、ドアノブに手をかけた瞬間に、

「ウチの可愛い生徒に手え出したら、ただじゃおかんで？」

と、『狩る側』の声音で言い放った。

2人の巨漢は返答もせず、ドアを開け、出ていった。

残された蘭豹は、校舎の方を見ながら、

「これから忙しいなるで、頑張рийや、柳生」

その視線の先で、爆睡している少年を見ていったのか、それとも、見えずに言ったのか……。

今日の授業も終わり、特に一緒に帰る友達もない俺は、寮への帰り道を歩く。バスはあるが、俺は帰りは歩いて帰る。主に、お金がもったいないからだ。

「しかし、あの時、誰を見てたんだろ……。少なくとも、俺じゃないんだろうけどなあ……」

そう、あの時見たスコープの光……。あとで確認したが、あの時間帯、狙撃科スナイプの生徒は、授業には全員出席していたらしく、情報科インフォルマの校舎には教員しか残っていなかったそうだ。そして、その教員は全員、狙撃とは無関係な人だったらしい。

他にもいろいろと休み時間の合間に調べてみたが手掛かりはなく、結局は謎なままである。

とりあえず、もうそのことを忘れて、今日は早く寝ようかなと思いつつ、寮の階段をのぼり、自室のドアを開ける。

「ただいまー」

「……………あ、おかえりー!」

と、部屋の奥の方で返事が聞こえた。

俺のルームメイトで、装備科アムドの江坂洋介だ。

「今日の授業も寝てたのかー?」

……………こいつは、俺が帰ってくるたびこれである。まったく、俺がいつも寝ているような言い方だな。俺だって、起きている時は起きているぞ?」

「そういうお前も、今日もルーズリーフに設計図書きっぱなしか?」
そして、こいつはルーズリーフに『妄想』と称して、何かの設計図をかきながら、ハアハア言っている……………らしい。クラスが違うから確認はできないが、それはある意味、幸せかもしれない……。

「おう、そーいやお前の欲しがっていたブツが出来るかもしれないぞ」

「……………?」

欲しがっていたブツ? そんな危なそうなものを頼んだ覚えはないんだが…………。

「まあ、できたら渡すぜ。それまで楽しみに待ってな」

「おい、気になるじゃねえか……」

「ハッハッハッハ、まあ、渡せばわかる(笑)」

「すっげえ気になる上、口答で(笑) って……」

まあ、いいや。そんな時になればわかるだろ。そう思いつつ、俺はキッチンに立つ。

「おう、お前が料理作ってる間に、お前のファイブセブンのメンテしとくぜ」

と、後ろの方から投げかけられた声を気にせず、料理を始める。

俺がこの高校に来てしまった理由……それは、あらゆる高校を滑って、滑って、さらに滑って。そして、定員割れを起こしていたこの武偵高校の探偵科インクスタに入学したわけだ。

しかし、入っていきなり銃を買って言われたときには、驚いたのなんの。

何も知らないまま、店に駆け込んで、『装弾数が多くて扱い易い銃』と言った結果、ファイブセブンを渡された訳だ。

ついでに、カスタムは全くとっていい程していない。お金かかるし、面倒だし、そんなに執着ないし。

さて……と、だいたい出来たかな…………。皿に『料理』を盛り付け、ダイニングに持っていく。

「なんだ、今日の夕飯は手抜きか?」

まあ、そういうのも仕方ないよな……。

今日の夕飯は野菜炒めだ。簡単なレシピを言うと、レタス、ニンジン、エノキ、豚こまをフライパンで炒めて、塩とコショウで下味をつけて、そこにマヨネーズ、ウスターソースを入れて軽く混ぜてすぐに火を止める。それで出来上がりだ。手抜き以外のなんでもないが……

「これでも美味いんだぞ？それに、お前が材料買ってきてないのが悪いんだろ？」

「いやー、お前だったら俺のことをちゃんと理解して、買ってきてくれるかなーと」

「そうかそうか、だったらお前も俺のことを理解して、朝早くに起きてくれるといいんだがなー」

「わかってないからお互いこうなってるんだよな？」

「そうだよな、ハッハッハッハ」

「ま、仕方ないよな、ハッハッハ」

お互いに、肩を叩き合いながら笑い合う。その方を叩く力がお互いにどんどん強くなっているのは気のせいか…………。

というか、近くから見ていたらこの光景がシニールにしか見えなさそうだ…………。

「とにかく、飯はあるんだし、食おうぜ？」

あ、洋介のやろう、話そらしやがって…………。でも、腹が減っているの、同意して飯を食う。

「しかし、むぐ、お前、むぐ、ファイブセブン使ってるのか？」

「口にモノを入れたまましゃべるな、唾を飛ばすな。それと、俺は銃はなるべく使いたくない。だから、使用回数なんて、1週間に1回あればいい方だ」

「道理でな。お前のファイブセブン、何回メンテしても、問題なんでありやしねえ。おかげで、メンテも楽だ。メンテ代取らないから、家事を任せるって、やっぱいい話だったなあ…………」

そう、こいつは、俺からメンテ代なんて取ったことはない。しかも、こっちから依頼すれば、趣味がわりにいろいろな設計製作までしてくれるという、いい奴なのだ。代わりに、家事全般を俺が担当する羽目になっているのだが、もともと俺の親は厳しく、家事全般は小学生の頃には叩き込まれていたから、問題なく出来ている。

こんなふうに、持ちつ持たれつの関係で洋介とこの部屋に住んでいる。

食後、2人で課題を片付けて、ゲームをしていたのだが、のどが
渴いてきて、

「なあ、天斗、ジュース買ってきてくれないか？」

「自分の分くらいは金出せよ？」

「わーってるよ」

と、言うことで、寮の1階にある自販機までジュースを買いに来て
いた。

のだが……

「柳生天斗だな？」

やたら体のかい男に絡まれていた。

さて、何が起きた？

俺は普通にジュースを買いに来たのに、なんでこんなどう考えても生徒ではないような男（教員でも見たことがない）に絡まれているんだ？

寮の階段を、降りて、自販機で洋介に対しての囁やかな悪戯として、夜中にあえて『朝専用、スッキリ爽快！ブラックコーヒー』という銘柄のコーヒーを買って、自分の分はあったかいコーンスープを買って。そして、寮の階段を登ろうと思ったときに、背後から

「柳生天斗だな？」

と、声をかけられたわけである。

男の特徴は、体がでかく、服装は全体的に黒。コートを羽織り、顔はどこぞの秘密結社のごとく、サングラス……にしてはゴツイ物と、帽子で半分以上隠されている。

「ええと、そうですけど、一体なんでしょうか？」

という、俺の疑問に答えるつもりがないかのごとく男は懷に手を伸ばす。

まさか、銃でも出してくるんじゃないかな………。なんて、武偵校だったら出てきても仕方ないんだっけ？俺が単純にエンカウント率が低いだけだろうしな（まあ、蘭豹のことは省くが）。

で、出てきたのは？

デザートイーグル
DE……マジで銃が出てきやがったよ。

「何のつもりだ？」

その疑問に対して、その男はたった一言、

「お前を殺す」

とだけ、答えた。その言葉には、情も、興奮も、狂気も、雑念と呼

ばれるそれがなく、ただひたすらな殺意が備わっていた。

その瞬間、鳥肌が立った。体が動かず、声も出ず、呼吸は荒くなり、鼓動も早くなる。思考する余裕もなくなり、周りの音が遠く聞こえる。視界が目の前の男と、その男が握る黒い塊に絞られる。

男がD Eのセーフティを外す。

———俺……死ぬんだろうか……。

男がD Eを俺の頭の当たりに向けて構える。

———せめて、最後は病気で、病院で家族に囲まれて死になたかったなあ……。まあ、そんなこと言うには、早い年齢なんだろうけど。

男の、引き金にかけた指が力む。

———………シニタクナイ……。

男が引き金を引く寸前、俺は体が勝手に動いていた。身を低くして、前に走り出す。

男の顔が驚きに変わっていくのが、ひどくゆっくりとした動きに見えた。そのまま、男が引き金を引くのも見えた。

轟音とマズルフラッシュ。弾丸なんてものが見えるほどの動体視力は無いが、その弾丸が通ったあとの音の壁……のようなものが自分の顔の数十センチ右を通っていくのをかろうじて見た。

俺は、その男の脇を走りぬけ、ひたすら走る。

咄嗟にファイブセブンを探したが見つからず、携帯も自室に置いてきたのを思い出し、そのまま男の後方へかけていく。

男が振り返ったときには、俺はすでに女子寮の階段を登っていた。女子寮の屋上、そこに行つて俺はやっと落ち着いた。

息が上がって、喉が乾いた。だが、いつあの男が戻ってくるかわからない以上、下手な行動は出来なかった。

しかし———

「また、これで救われたな……。」

『これ』とは、俺の子供の頃からの……まあ、なんだ、かつこよく言えば、特殊能力みたいなものだ。

危機的状況になると、野生動物並みの本能と、火事場の馬鹿力と、一時的に瞬発力、反射神経が上昇する。

子供の頃、車にひかれかけたときも、喧嘩で、相手が大きな石を投げつけてきたときも、『これ』のおかげで助かった。そして、あのときも……。

ただ、この状態になったあとは、大抵体のどこかを壊す。で、今回は……奇跡的に問題なしか……。

そのとき、屋上の扉がゆっくりと、しかし、確実に開かれた。

「誰だ!？」

と、無い銃を探りながら、開いた扉の先の闇に向かって問いかける。そこに、真っ白な光がともった……いや、懐中電灯……なのか? いや……

「まさか、本当に男が女子寮に入ってきてたなんてね。さっきの銃声もあなた?」

扉のむこうから現れたのは……女子寮だから当然女性。髪型はセミロングで、頭につけたカチューシャが何かの光で反射する。月が出てきて照らされた手には、センチメートルマスターが握られていた。しかし、センチメートルマスターにはレイルは付いていなかったはずだから、ドーソン・プレジションのスピードレイルを使ってるんだろうか。下部にレイルが付いている。そこには……インサイトM6Xだろう、フラッシュライトの明かりがやけに眩しい。

「……敵じゃあ……ないのか?」

「敵って、さっきの銃声? お遊びでもしてるの?」

「そうじゃなくて……」

本当のことを言ったところで、信じてもらえるわけもないだろう……。

そのとき――――

「まったく、どこまでいけば気が済むんだ」
と、さっきの男が屋上にまで上がってきた。

「誰？このおっさん」

「君で言う、お遊び相手ってやつかな……」

と、冗談めかして言う

「じゃあ、さしずめ鬼ごっこってところかしら？」

まったく、こっちはお遊びじゃないってのにな……。

「まあ、そういうことだな」

と、苦笑しながら答えると、その少女は真面目な口調になり、

「あなた、武器は？」

と聞いてきた。

それに対して俺は、ホールドアップお手上げで答えた。

「ま、寮から少し出るくらいで銃を持つなんて、よっぽど優秀な人だけだからね」

「そういうことだ」

「でも、今度からは持ち歩いたほうがいいわね」

「だな」

そう言い、目の前の男に意識を集中する。

男は苛立ちを含めた声で、

「話はまとまったか？」

と聞くが、少女が

「まず、まとめるような話でもなかったわね」

と、笑いながら流す。

俺は、少女が話を持たせている間に、周りを見回す。武器がない俺は、逃げることにしかできない。

腰のベルトにはワイヤーがあるが、あくまで逃走用だし、もしこれで女子寮を下りようものなら、次の日には変態扱いのオンパレードだろう。大体、よく考えたら長さが足りない。

ということは、俺には、武器も逃げ場もないわけだ。だから、今すぐにでも武器が欲しいわけだ。が、周りを見てあったものが、余っているのか、地面に置かれた物干し竿、石ころ、ボロ雑巾、真っ黒な軍手。

せめてもう少し……もう少し何かあれば……。

………ない。何もない。諦めた。

仕方なく物干し竿の方に動こうとするが……

「お前の行動なら、丸見えだぞ、小僧」

バレていた。というか、名前から『小僧』になったぞ、呼び方。

「ありやー、じゃあ、頑張ってよけてねー」

と、少女が言ってから、一気に駆ける。

そのかける最中に、レーザーサイトの光った箇所……左足の足首、右足の太ももに向けて銃弾を1発づつ放つ。それを男は大きく躲し、DEを俺の方に向けて撃とうとした。が、それを少女の発砲によって止められる。

俺はその間に物干し竿にダッシュする。豪音が響く中、もう少しで物干し竿に手が届くところで男が、今度は俺に向かって、胸の当たりを狙いつつ、DEを撃ってくる。

そして、また来る『あの』状態。音の壁のようなものが、かなりなスピードで近づいてくる。それに対して、俺はスライディングして、物干し竿をつかむ。

弾丸が頭上数センチを通り抜けたのを気にせず、俺はコンクリートの上を滑りながら地面に手を付きつつ立ち上がる。

それと同時に、戦っていた2人が距離を置く。

男が笑いながら、

「よく手に入れたもんだ。で、それでどうするつもりだ？俺を叩こうっていうのかい？」

と言ってくるもんだから、俺は一言、こう答えてやる。

「ああ、お前には、これで十分だ。」

と言いつつ、長い物干し竿を槍の要領で構える。

「ほざけ！」

と言って、俺に向かってDEを発砲してくる男。

狙っているのは、頭の、しかも額の真ん中。男の目と銃口が物語っていたのを頼りに、体をわずかに反らし、物干し竿の真ん中あたり

をその軌道上に持っていく。

轟音と同時に、物干し竿が、きれいに半分に分かれた。その衝撃で出来た破片の1つが、俺の頬に一筋の傷を残して飛んでいった。

「……………なん……………だと？」

「嘘でしょ…………？」

と、男と少女が驚いているが、気にしない。

俺は、別れた物干し竿の片方を持って、驚愕している男に向かって走り出す。

男は驚きつつも銃を発砲する……………が、銃口が全く違う方向を向いている。このまま走っても問題無いな……………。

俺の予想通り、マズルフラッシュと轟音が響いても、弾丸が風を切る音は左方向に流れていった。

俺は、そのまま至近距離で、男の手のD Eに向かって物干し竿だったものを逆袈裟に振り上げる。

男の手からD Eが離れ、宙を舞う。

そのまま、俺は一回転しつつ、男の頭部を死なない程度にぶっ叩く。その衝撃で男がよろめく。

その間に、背後に周り、ちょうど落ちてきたD Eを少し遠いところに蹴飛ばして、足に力を入れる。男が振り向こうとして、俺から見てちょうど男の横顔が見えたところで俺は跳ぶ。そして俺は、男の首筋にごくごく弱く、しかしある程度強く物干し竿を振り下ろし、すぐに首筋から離す。

すると、男は白目をむいて倒れた。

手刀打ちしきうちのそれを道具でやっただけのことだ。

「こんなもんかな？」

と、俺は言った。

ついでに、近くにいた少女は、呆然と、俺の姿を見ていた。

結局、男を気絶させても、拘束するものもないので、少女の携帯で拷問科の綴ダギユラ 梅子と呼んでもらった。が、ぶっちゃけ、俺はこの先生が大嫌いである。

授業中に寝ていたら、ハイヒールで足に徐々に力をいれてくる。そうするとどうなると思う？

ガマの油取りという話をご存知であろうか。カエルから油を取るのには、水から徐々に加熱して、カエルが温度上昇に気がつかないまま死んでいくという話である。それに近いもので、寝ているという鈍い状態で、足に徐々にヒールがめり込む……。痛さに気がついて、起きたときには綴はすでに机から離れていて、授業の後にそこを見たら無残にも、真っ赤になっているという話だ。

ああ、思い出ただけでも恐ろしい……………。

とにかく、そんなことがあったせいで、俺は綴が嫌いになった。寝ないように自分の中で誓ったが、起きていても、こいつの授業自体が拷問のようなものだった。

ゆっくりを通り越して、のっそりとした喋りと、途中のあくび。さらには授業中にどう考えても、タバコじゃないような臭いのタバコを吸っている。

ついでに、一部のやつは、わざと寝たフリをして、足を踏まれるたびに恍惚とした表情になる。要は、Mと言う奴だろうな……………。少なくとも、俺にはそんな趣味はない。

さて、綴は来は良いものの、ものすごく眠そうで、しかも、男を見た瞬間、あからさまにめんどくさそうな顔をしたが、その男を引きずりながら、女子寮の扉を出ていった。相変わらず、あの細腕のどこにそんな力があるんだろうか……………。

さて、俺も帰るかな……………。

「ちよっと、あなた待ちなさい」

「……………俺？」

「以外誰がいるのかしら？」

「……………」

まあ、居ないもん。他に誰もいないもん。

「えっと、あ、そうだ、助けてくれてありがとう」

「どういたしまして」

「じゃあ、俺はこれで……………」

さて、早く帰って、洋介にこの冷めた『朝専用、スツキリ爽快！ブラックコーヒー』を渡さない……………。

「だから、ちよっと待ちなさい」

「……………えっと、何のようでしょうか？」

そう言うと、少女は頭を抱え込んだ。

どうしたんだろう、頭でも打ったんだろうか……………？

「あんた、名前も何も名乗らずに行くの？馬鹿なの？死ぬの？」

「いや、名乗っても、すぐに忘れられるだろうし、こっちから勝手に名乗ったら、嫌われるだろうし……………。というか、『死ぬの？』って、死なないよ！？」

「とにかく、名乗りなさい！今すぐ！」

なんだろう、すごいイライラしてるように見えるなあ……………。とりあえず、名乗ったほうがいいのかな……………。

「柳生天斗、探偵科^{インクスタ}の2年生。ランクは……………」

「ああ、ランクはどうせSとか、そのへんでしょう？」

「いや、Eだけど？」

その瞬間、沈黙が流れる。

「え……………？」

「いや、だから、Eランクだよ？俺」

「はあああああああああああ！？」

いや、そんなに驚くことなんだろうか……………。少なくとも、俺は自分の運動神経は悪いと思ってるし、授業態度も悪いと自負してるし、テストは赤点ギリギリだし……………。

「なんで？試験でも休んだの？本気出してなかったの？それとも一体何！？」

「いや、授業とか、眠いから寝てるし……………」

「体育とかは？運動神経は？」

「体力テストの結果はBと、ここでは低い目。特に秀でたものもないしな。それ以前に、やる気がない」

少女がまた絶句していた。

俺には些細なことなんだが、少女にとっては驚くようなことらしい。

「なんであんな反射神経でEランクなのよ、どれだけやる気のないよ、宝の持ち腐れじゃない……………」

何かブツブツ言っているが、気にしないで帰ってもいいんだろうか……………」

とりあえず、屋上の扉に向かって歩こうとしたら、

「だから、待ちなさいって！」

また呼び止められた。

「今度は何？」

「あんた、私の名前聞いてないでしょ？」

そういえば、そうだった……………。が、

「聞いても、すぐに忘れるだろうし、何より、君はSランクでしょ？俺はSランクの人とは普段はあんまり関わることないし、良いだろう？」

そう言い放って、屋上の扉を開ける。

階段を降りているときに、

「強襲科^{アサルト}の野田雪穂よ、覚えておかないと承知しないんだからね！」と屋上から聞こえてきた。

俺は気にせずに階段を下りていった。

部屋では洋介が寝落ちしていた。そののんきな顔が気に入らなかったのも、腹の上に『朝専用、スッキリ爽快！ブラックコーヒー』

を落としてやると、

「ぐほぁ!？」

と奇声を発して飛び起きた。

「おはよう、洋介」

「おお、おはよお」

まだ寝ぼけている洋介に、コーヒーを開けて差し出した。

洋介はそれを一息に飲んで、

「ブホァ！」

吐いた。

「て、てめえ、なんて事しやがる!？」

「朝専用のコーヒーを真夜中に飲ませただけだが？」

「せめて文字通り朝に飲ませろ！」

「ッハッハッハ」

俺は、笑いながら思っていた。

自分の知っている日常は、まだ健在だと。少し前に命を狙われたことなんぞ、ただの夢か幻覚だと。そう思っていた。

でも、既に俺の日常はぶち壊されていたことには気がつかなかった。

1-4 (後書き)

えっと、学校がテスト期間に入っただけで今回のこれを投稿したあと、多分1週間ほど休みをもらいます。

1-5 (前書き)

テスト期間終わってないけど、1週間くらい経ったし、投稿してもいいよね！？（と、テスト赤点直行フラグをたててみたり……………。

次の日、昨日の夜のことなんぞ、きれいさっぱり忘れて学校に登校した俺。

登校して早々に、机に突っ伏す。昨日の『あの』状態は、体を壊すとともに、精神的にも疲労が尋常じゃないのだ。しかし、そのことすら忘れているわけだが……。

そして、俺の日常は、次の瞬間きれいに消し飛んだ。

「このクラスに、柳生天斗って奴いるー？」

……なんだろう、この声、すっごく聞き覚えがあるのに思い出せん……。

まあ、いつか。俺のこと呼んでも、今は寝てるから帰ってくれるだろうな……。

と、思っていたら机を蹴られた。

あくまで、軽く……ごく軽く蹴られた。

だから、無視をした……のだが、次はかなり強く蹴られた。

………起きたほうがよさそうな気がしてきた……。

薄目を開いて、机を蹴った主を見てみると……、うわ、美少女で、笑顔が似合いそうな子なんだが、今は無表情で青筋が……。蘭豹ほどじゃなくても、すごい怖い。

よし、起きよう。そうしよう。そう思って、体を起こし始めたのだが、それと同時に、少女が思い切り足を振り上げる。ちょ、待て、俺起きてるぞ！？

その思いもむなしく、俺が起きて軽くなった机に、その少女のフルパワーであろう蹴りが炸裂した。

「ぐぼはぁ!？」

結果、俺の腹に机がめり込む形になった。

腹を抑えて机にうずくまる。というか、どんだけ力込めたんだよ……。

「蹴る。蹴って蹴って蹴りまくるわ。いいわね？」

その少女……野田さんの言葉には有無を言わせない覇気があった……。だから、俺はごく自然に

「は……はい」

頷いてしまった。

それに対して野田さんはニンマリと笑い、今度は真剣そうな表情に戻る。

「で、さっきまでの口ぶりだと、昨日何があったかも忘れた？」

「うん、綺麗さっぱり、何もかも」

「でしようね……」

また彼女は頭を抑えながら、こんどはため息を漏らした……。

「昨日、命を狙われたの覚えてる……？」

「そんな馬鹿な!？」

「なんでだろう、記憶喪失の人よりタチが悪い気がするわ……」
気のせいかな、今すごい馬鹿にされた気がする……。

「あなた、馬鹿？」

うん、気のせいじゃなかったよ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3887x/>

輝き出す原石（仮題）

2011年10月20日13時07分発行